

平成30年6月19日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02272

研究課題名(和文)「土地の想像力」を生み出す近代文学の「風景表象」の空間構成

研究課題名(英文) New System of "Imaginary Energy of Place" brought by Landscape

研究代表者

中島 国彦 (Nakajima, Kunihiko)

早稲田大学・文学学院・名誉教授

研究者番号：00063785

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：新しい日本近代文学の分析のためには、従来の「主義」「派」による整理は有効ではない。文学者がどういった「風景」にどのように対峙したかを考えつつ、描かれた「場所」が喚起する独特な世界を跡付けることが大切である。夏目漱石の描く「東京」の「風景」は、主として明治・大正の「山の手」だが、さまざまな「場所」が作品を立体的に支えている。漱石は、作品の中で、「東京」とともに生きたと言える。そうした視点から、漱石の作品を分析し、「坂と台地のドラマ」「山の手と下町」「現実と想像の場所」などいくつかの方法で、その魅力を明らかにした。漱石とゆかりの正岡子規の営為にも眼を向け、さらに堀辰雄の体験をも合わせて考えた。

研究成果の概要(英文)：In order to make new research for modern Japanese literature, the concept of "Imaginary Energy of Place" brought by landscapes is very important. Natsume Soseki depicts many landscapes of city Tokyo very skillfully, for example "Slopes and heights" "Up town and down town" "Real and imagination" of Tokyo. We have new experienced of modern novels by gaze the unique descriptions of place.

研究分野：日本近代文学

キーワード：風景表象 自然描写 土地の想像力 夏目漱石 東京 正岡子規 堀辰雄

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者個人による研究である。研究代表者は、これまでも「科学研究費補助金」を何年にもわたって受領し、日本の近代文学の描く「風景」「自然」についての識見を深めて来た。それらは多くの学術論文としてまとめられ、報告されて来た。

それを、近年「風景表象」という概念で改めて組織化し、その成果を基盤に、新しい日本近代文学史を構築しようとするのが目標とされた。その背景には、近代文学を考えるパラダイムの変化がある。

文学の歴史を「主義」「派」といった既成の概念によってまとめるのではなく、言葉や表現の位相を観察し、そうしたものを媒介に、どういう新しい表現によってそれを定着するのかが問われるようになったのである。

研究代表者はかねてより、こうした視点から、さまざまな近代作家の営為を分析して来た。そのためには、特定の作家の研究を深めるのみならず、それを時代や歴史に位置づけ、美術・音楽など隣接諸芸術との関連に留意し、総体的に考える姿勢が必要である。本研究が採択された背景には、これまでの研究代表者のそうした研究の姿勢に対する学界の理解と評価があったように考えられる。

研究代表者は、1984年に『近代文学にみる感受性』という単著を刊行、それによって「やまなし文学賞」を受け、早稲田大学から「博士(文学)」の学位を受領した。この研究を発展させる方向としては、対象を明治・大正の時期から昭和へと歴史的に拡大することも考えられたが、それ以上に近代の芸術家の「感受性」のあり方が典型的に示される、対象の切り取り方の分析が必要であった。そうしたなかで選ばれたのが、「風景」「自然」であり、そうしたものに、芸術家の「感受性」がどう働いたのかが、重要な研究対象となったのである。

こうした認識が明確になって、研究方法が考えられるようになったことにより、本研究がスタートすることになったのである。

## 2. 研究の目的

### (1) 「風景表象」概念の形成

研究代表者がこれまで続けてきた研究を総括出来るように、「風景表象」という概念を再構築しつつ、研究全体の序論としての意味付けを確立する。海外のイメージ論、表象論に対して、どう文学史的に援用できるかに注意しつつ、その実態を明らかにする。

「風景」を切り取る新しい視点を探り、それを作家や作品の分析に応用する。

### (2) 「土地の想像力」とは何か

「風景表象」がひとつの結節点として、意味深い「土地」として現れることが多いが、そうした特出すべき「土地」を考察の対象にし、その文学的意味を考える。それぞれの「土地」の持っているエネルギーとは何か、とい

う視点から、その内実を、「土地の想像力」という言葉で位置づけ、新たな意味を考察する。

(3) 「東京」という「土地」を対象に、その形態、意味、文学史的位相の考察など、新しい都市論の達成を目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 近代は「風景」をどう捉えてきたのか、明治以降の代表的な「風景」概念を辿って、その歴史的位相を分析する。

その新鮮な試みは、文体との相互関係から際立つ。漢文脈からの歴史の中では、新鮮な試みはおのずと制約がある。過度期の表現においては、どういう表現が多く使われていたのかに眼を向ける。

明治の「風景」認識において大きな変容をもたらしたいくつかの著作を分析する。

たとえば、志賀重昂「日本風景論」の位置を検討する。

明治30年代の新しい「風景」の発見が、どのように日露戦後の近代文学の豊穡に結び付くかに注意をする。

(2) 夏目漱石の業績を、この研究の視点から、総合的に分析する。

特に、漱石の作品が、具体的に特定の「土地」と結び付いていることを明らかにし、作中の固有名詞の存在や、固有名詞を超えた想像力の中の「場所」の意味合いを検討していく。

(3) 漱石との関連で、「風景」に眼を向けた、例えば正岡子規などの営為を検討する。詩歌に広げるよりも、散文の世界、例えば子規では「写生文」の世界の内実に注意するようにする。

(4) 漱石以外の近代の文学者における「風景」の問題を検討する。

これまでの研究では、東京の下層社会を描いた松原岩五郎などにも焦点を当てたが、今回は絞って堀辰雄など漱石と対照的な作家の分析を通して、近代文学の総体を明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) 「東京」を描く夏目漱石

本研究の3年間の間に、夏目漱石が歿後100年、生誕150年を迎え、漱石の営為にいつになく関心が向けられた。「風景表象」の研究においては、夏目漱石は格好の対象である。「東京」という「土地」について、中でも「下町」と「山の手」の関係を考えるに当たっては、忘れられないものである。とりわけ、「山の手」の「土地の想像力」に関しては、まだまだ未開拓の部分が多い。

2017年9月、新宿区早稲田南町7番地、漱石が逝去の日まで住んだゆかりの場所に、新

宿区立「漱石山房記念館」が開館した。2011年の準備の時点から助力をしてきたが、開館に至るまでの間、研究代表者が進めてきた漱石研究の成果を提供してきた。「(仮称)「漱石山房」記念館整備検討委員会」の座長としての活動のほか、この間の研究成果を「常設展示監修」という形で提供協力、開館後に刊行された公式ガイドブック『新宿区立漱石山房記念館』(2017・11、新宿区)に執筆助力した。

研究を広く社会に公開する一つの手立てとして、意味深い経験であった。文字通り、「土地の想像力」の典型的な例であり、そうした視点でのアプローチを原稿執筆、講演などで具体化出来て、ありがたいことと考えている。

「東京」をめぐる、これまでさまざまな論文を書いてきたが、一般向けの書いた文章や、視点がクリアな文章をいくつか集めて単著『漱石の地図帳』(2018・7、大修館書店)をまとめることが出来た。「東京」を中心に、漱石作品を読むときの新しい視点を提出したものである。それらの文章には、必ずしも「風景表象」の語を用いているわけではないが、それを背後に潜め、「東京」の「土地の想像力」を分析するよう努めた。書き下ろしの研究も多数収めたので、本研究の成果として自信を持って問うことが出来ると考えている。

その構成を示しておく。

漱石が生きた「場所」

「時代」の奥に潜むもの

『猫』と漱石

「虚」の空間を歩く

坂と台地からみた漱石作品

『坊っちゃん』と漱石

都バスでまわる漱石一日ツアー

東京を遠く離れて 地方都市・外国と自然の中で。

なお、近いうち(2018・7)に発表される論文に、「漱石作品における「東京」の位置「山の手」と「下町」の視点から」がある。上記の単著のひとつのテーマを、さらに発展させたものである。

## (2) 漱石と地方の風景

漱石の作品には、「東京」以外の土地がさまざまに出て来る。たとえば、その一つに九州熊本地方の風景がある。数回の調査旅行を通して、熊本と漱石をつなぐものを考察した。中でも、「草枕」「二百十日」は、熊本郊外を背景とするものだが、作品の「風景表象」が作家のどういう想像力によって形成されているかを探る手がかりになった。

本格的な論文化はまだだが、研究報告の中で「二百十日」の表現を、それをトレースした与謝野寛ら「五人づれ」の「五足の靴」の表現と比較した研究は、これまで注意されていなかった視点であり、地元の研究者からも評価された。

「阿蘇を見つめる眼 「二百十日」と「五足の靴」をつなぐもの」は、短文だが、「くまもと文学・歴史館報」に寄せた文章であり、その概略がうかがえると思う。本格的な論考として、ぜひ近い内に成文化したいと考えている。

「大山崎に出会う 漱石・京都・加賀正太郎」の題で、アサヒビール大山崎山荘美術館で話をしたが、これこそ「大山崎」という「土地の想像力」に深く関わるテーマであろう。新事実の報告も出来たが、これも進行中の全集の「注解」作成に資する調査となったと思う。

漱石が「大患」を患った伊豆の修善寺も調査をし、「大患」時代の思いを記した「思ひ出す事など」の分析も準備している。

ロンドン留学時代については、小品「永日小品」に照明を当て、ロンドン体験と小品の文体の検討を経て、日露戦後の独特の「風景表象」であることを詳細に検討することが出来た。

「小品」という世界と漱石の表現 「永日小品」と「それから」にみる漱石の一九〇九年」を「国文学研究」に書いたが、その成果の表れである。

「永日小品」の中の「印象」の一篇は、ロンドン到着の翌日の体験を描くが、ロンドンという固有名詞は出て来ず、抽象的な「風景表象」として形象化されている。こうした表現の冒険こそ「小品」だから出来たことであり、その文学史的位相は深いものがある。今後さらに注意すべき視点かと思う。

## (3) 漱石と絵はがき

岩波書店に300通もの漱石宛の絵はがきが伝わっており、その調査を長島裕子と共に依頼され、数年がかりの成果を、編著『漱石の愛した絵はがき』(2016・9、岩波書店)として刊行することが出来た。全体の三分の一を紹介、解説と翻字を添えたものである。漱石研究を背後から支える業績として歓迎された。

その構成を示しておく。

はじめに

第1章 「吾輩は猫である」の反響

第2章 門下生から

第3章 ゆかりの文学者たち

第4章 海外便り

第5章 満韓の人びと

第6章 修善寺の大患

第7章 家族とのやりとり

第8章 年賀状のさまざま

第9章 全国の読者から

はがき文面翻刻

2016年秋の日本近代文学館を会場にした展覧会から、熊本・京都・高松・鎌倉・松山・金沢と各地で絵はがきが展覧され、その監修・講演・原稿執筆を担当した。

この作業はまだ進行中であり、その過程で、2017年の福井での新資料発見に際し、学術的

なアドバイスが出来たのもうれしいことの一つである。

#### (4) 時代の中の漱石

「風景表象」と直接つながらないものの、それとの接点がある漱石論もまとめた。「俳句」のジャンルでの考察も試み、その延長で漱石の親友の正岡子規に関する論考を発表することが出来た。

「近代作家にみる「俳句」の位置 漱石・子規から虚子・横光まで」を「国際文化表現研究」に発表した。研究代表者にとって、「俳句」というテーマによって、明治から昭和にかけての文学者の営為を総体的に展望したのは初めてであり、いい経験になったと思う。

また、長年の原稿・書簡など漱石自筆資料への眼を支えにした、資料解析の論文・研究発表を公表した。そのためには、本研究で収集した各種の資料が役立って、その意味づけも出来、ありがたかったことを記しておく。

例えば、「ある「文壇」意識の位相-新資料にみる一八九七年の漱石の俳壇意識」を「文学」に発表した。新資料の翻刻、その意味づけについて、かなりの資料調査を踏まえて立論しており、この成果は刊行中の『定本漱石全集』の書簡篇の巻にも資するものである。こうした資料発掘ができたのも成果の一つである。

「講演を文字にするということ 「私の個人主義」の例から」は、愛媛大学での招待講演だが、愛媛大学の科研プロジェクトに参加する形であり、相手方にも喜んでいただけた研究である。

#### (5) 堀辰雄と軽井沢・大和の「風景表象」

漱石以外では、調査を進めてきた、堀辰雄と軽井沢・飛鳥大和地方とに関わりついて、従来の研究を一步進めた成果が出たと考えている。現地調査を積み重ねることで、実際の生の資料の報告、その広い視野からの意味付けが出来たことによるもので、学界への貢献ができたのではないかと考えている。

追分の堀辰雄文学資料館での調査では、これまで報告されていなかった西洋音楽資料（レコードや書物）に照明を当てることが出来た。

「幽冥の世界への前奏曲 堀辰雄のショパン「二十四の前奏曲」研究を巡って」を「比較文学年誌」に発表した。長く東京を離れ追分で過ごす生活の中での音楽体験であり、「場所」とのつながりが注意されていると思う。

また、「悲劇的」という言葉の意味するもの 堀辰雄の音楽体験を出発点として」という研究発表を、「日本比較文学会東京支部」で試みたが、上記論文をさらに発展させて、文学者と音楽の関連を巨視的に考えたものである。まだ論文化に至っていないが、近い

内に実現したいと思っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

中島国彦、近代作家にみる「俳句」の位置 漱石・子規から虚子・横光まで、国際文化表現研究、査読無、14、2018、pp.1-13

中島国彦、阿蘇を見つめる眼 「二百十日」と「五足の靴」をつなぐもの、くまもと文学・歴史館報、査読無、3、2018、pp.6-7

中島国彦、ある「文壇」意識の位相-新資料にみる一八九七年の漱石の俳壇意識、文学、査読無、2016、pp.26-37

中島国彦、幽冥の世界への前奏曲-堀辰雄の「ショパン」二十四の前奏曲」研究を巡って、比較文学年誌、査読無、2016、pp.1-15

中島国彦、子規随筆の意味するもの 「明治三十三年十月十五日記事」をめぐって、早稲田大学文学研究科紀要、査読無、2016、pp.1-14

中島国彦、「小品」という世界と漱石の表現 「永日小品」と「それから」にみる漱石の一九〇九年、国文学研究、査読無、2015、pp.69-83

〔学会発表〕(計6件)

中島国彦、近代文学の豊かな山並み 漱石を軸に考える、福井ふるさと文学館、2018

中島国彦、山崎一穎、鷗外 VS 漱石、文京区、2017

中島国彦、講演を文字にするということ 「私の個人主義」の例から、愛媛大学、2017

中島国彦、近代作家にみる「俳句」の位置 漱石・子規から虚子・横光まで、国際文化表現学会、2017

中島国彦、「悲劇的」という言葉の意味するもの 堀辰雄の音楽体験を出発点として、日本比較文学会東京支部、2016

中島国彦、長島裕子、大山崎に会う 漱石・京都・加賀正太郎、アサヒビール大山崎山荘美術館、2017

〔図書〕(計2件)

中島国彦、大修館書店、漱石の地図帳 歩く・見る・読む、2018、226

中島国彦、長島裕子、岩波書店、漱石の愛した絵はがき、2017、142

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 国彦 (NAKAJIMA, Kunihiko)

早稲田大学文学学術院・名誉教授

研究者番号：00063785